使えないっ！

sky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
使えないっ！

【Ｎコード】
Ｎ４９１２Ｙ

【作者名】
ｓｋｙ

【あらすじ】
世界の分岐があってから数百年後の魔法学園ファンタジー。

第1話　世界の境界＝学校（前書き）

早過ぎる作品の前倒し。作者の都合で月日が経った分岐世界のお話し。

第1話　世界の境界＝学校

世界は革変した。
今からおよそ５２０年前、ロンドンの大時計塔の清掃をしていた子供がある雪の降る寒い日、空から落ちてきた一粒の光を掴んだ事で世界は大きく変わってしまった。いや、歪んでしまった。

その光は手に溶け込み少年を輝かせた。
その光は少年に世界の真理と呼ばれる物を見せた。
そして、世界の仕組みを識(し)る。
その光は少年を変えた。
その少年は世界を変えた。

「さむっ」
ベッドの上では一人の少年が寒さに身を震わせていた。
少年は布団を体に巻きつける様にし蹲(うずくま)る。

１０月に入って間も無く雪が降った。
ニュースでは、魔法によるものだと報じられている。

『魔法』。

この世界では１２５０年前ぐらい前から当たり前の技能。

（・・・・・・でも、俺は使えない）
少年は瞳を閉じる。

５２０年前。ロンドンの少年が発見し、研究し、今から４２０年前にやっと実用化された。
世界に降り注ぐ『魔法の因子』。
それが５ヶ月に入る前の、母親のお腹の中に居る胎児と結び付く事によって、魔法の使える体質で生まれる事が出来るそうだ。
でも、因子はいつも降っている訳じゃないので、人工的に因子を結び付ける事ができる技術が生まれた。
それにより爆発的に、魔法を使う事が出来る人が増えた。
なにせ、魔法は世界の理（ことわり）。使えた方が便利。進学、就職に有利。等々。
今や、世界は魔法で溢れてる。
だけど、それと同じく危険も溢れてる。
５１５年前突如、世界各地で空間に黒い歪みが発生した。そこからこの世のものとは思えない、まさに漫画の中の怪物が現れた。
怪物も魔力の様なものを持っていて、特殊な攻撃をしたり、動物のように牙や爪での攻撃もしてくる。魔力を持っている者は皆『魔力障壁』というものを無意識で発動しており、魔力の消費によって自己防衛をする事が出来る。そして、化け物も例外では無かった。
魔力障壁は、外部からの攻撃をある程度無効化する事ができ、その所為で銃弾等は通用しない。
そこで、世界中の研究機関は『怪物を破壊する魔法』を創った。
５年もする頃には完全な破壊魔法の理論が出来上がり、実用化され、怪物共を一掃した。
だけど、５年の間に世界の半分以上は破壊され一掃した後も度々歪みは発生し、その度怪物との戦いは起こり被害は増えていった。
今から、５１０年前、今迄とは比べ物にならない歪みが生まれた。
でも、発生してから１年経っても３年経っても化け物は現れない。
だけど、歪みはどんどん大きくなっていった。そして５年目。
空は黒い雲に覆われ、空気は淀み、黒い靄の様なものが溢れた。
大きな黒い歪みを割る様に黒い怪物は現れた。

全体的には大きな狗の様な形をしていた。
だけど、
黒く。
黒く。
ただただ黒いだけ。
身体に当たる光を吸収でもしているのか、全体の輪郭以外はわからず、正面から凹凸すら認識できない。
目はあるのか？
口はあるのか？

わかるのは耳と爪のような物があり、尻尾がある。
シルエットを見る限り狗のようだ。
そして、
理解したのは、
これは、
今迄とは違う。
大きさとか魔力とかそういったものではなく。

今迄以上の『死』を纏っている。という事。
人々は恐れ『闇』と呼んだ。

　だが、人々の心配をよそに、怪物は動かなかった。
そして怪物は3週間そのまま動かなかった。
だけど、そんな平穏を長くは続かなかった。
空間を割るように。
全てを拒絶するよに。
そして、眠りから覚めるように、
大きく雄叫びをあげる。
そして、動き出した。
いや、突然、消えた。

それはただ、早く動いた為、消えた様に見えた。というだけの話なのだが、それだけでは終わらない。
その黒い狗のような怪物は移動しながら、街を破壊し、地面を削り、止まったと思ったらまた動き出す。それを繰り返す。
破壊魔法を習得した精鋭軍団を『魔法騎士団』と言うのだが、世界各国の魔法騎士団はその黒い狗のような怪物を破壊する為様々な魔法を駆使したが全く意味が無かった。
そして、全ての魔法騎士団は黒い狗のような怪物一匹に全滅させられた。

それは、世界の希望が断たれた瞬間でもあった。
黒い狗の怪物は損傷があるかさえもわからない。わかるのは、世界を滅ぼすだけの力は残っているという事だけ。
もう、世界が滅ぼされるのを指をくわえて見ているしかない。
無力。
無力。
無力。
目の前で全てが壊れ、崩れ、消え去って行く。
それは、今までの怪物が蟻と同じに思える程、黒い狗のような怪物は圧倒的だった。
そして、
黒い狗のような怪物の前では、人類はあまりにも無力だ。

そこに、
黒い雲から一筋の光が大地を照らす。
そこには、一人の青年と八人の騎士達が立っていた。
青年は一度に十の魔方陣を創り、それぞれ別々の魔法が発動した。
八人は援護するように魔法を展開し発動した。
魔法は全て、黒い狗のような怪物に当たった。
怪物の悲鳴が響く。

魔法が当たり終えたと同時に、背中から剣を抜いた。
真横に薙ぐ。

一閃。

ただそれだけ、
その一閃で怪物は二つに別れた。
黒い狗のような怪物はボロボロと砂の様に崩れ、崩れた所は消えて行く。

怪物は、完全に消えた。

青年は、『最初の魔法使い』だった。

ロンドンで最初の魔法使い。

世界で最初に魔法を研究して、世に送り出した人物。
ロンドンの大時計塔を掃除していた少年は大きくなり世界を救った。
青年の周りには幾重にも魔方陣が展開され、それが重なり、繋がり、更に大きな魔方陣となった。
青年は呪文を唱えた。
唱え終わると魔方陣の中心の地面に、怪物を一閃で屠った剣を突き刺した。
途端、大地に描かれた魔方陣は赤く光り周りから闇が消えた。

封印。

黒い狗のような怪物が現れた場所は『極地』と呼ばれ、怪物達が頻繁に出現している為。二度とこのような被害を出さない為。封印を施したのだった。

これが最初の英雄伝説。

青年と共に戦った八人の魔法使い達は封印を監視する為、封印の地から東西南北を細かくし、八つの方位に分け、黒い狗のような化け物の出現した歪を監視した。

後に人々は彼らの事をこう呼ぶ。

『守護八家』

と敬意を込めそう呼んだ。

守護八家にはそれぞれ、黒い狗のような怪物を倒した者が持っていた魔導具を与えられ、

『ガラシア＝ハーランド』

『カルカシア』

『レノメス』

『ハイドラウド』

『ハルバノール』

『リマンダ』

『セイリン・フォリアードル』

『セイネル』

後に『神器』と呼ばれる。

守護八家は苗字に、偉大な魔導具の？名？を自（みずか）らの？名？とし冠す事にした。

黒い狗のような怪物を屠った事により青年は世界を救った英雄となった。

青年の名は、

『マキシ・ラストール・ウェドエール』

後に青年は様々な危機を乗り越え、怪物を屠り、歪を封じた『光

の英雄』と呼ばれる様になった。
青年はその後、魔術学院を造った。
『ウェドエール総合魔術学院』
それが、全ての始まり。

「魔法か・・・・・・」
少年は布団から顔と腕を出し壁を見た。
棚の上に置いてある写真立てに腕を伸ばし手を開き力を込める。
「・・・・・・」
何も起こらない。
（・・・・・・・・・・やっぱ無理か・・・・・・・）
っと、そのときだった。
「ユウタ、起きてる？」
突如、目の前にキラキラ光る小さな靄のようなものから声がした。
「起きてるよ、姉さん」
「じゃあ直ぐ下りて来て」
姉の言葉に従い。部屋を出た。
階段を降り、一階の居間の扉を開けた。
「おはよう」
テーブルの前にはエプロン姿の姉さんが立っていた。
「おはよう姉さん」
姉さんは笑顔で頷く。
「・・・・・・ところで、エプロンの意味あるの？」
「ノリよ、ノリ、やっぱそーゆうのは大事よ」
この姉『刻杖癒夏（こくじょうゆか）』は俺こと、『刻杖遊詩（こくじょうゆうた）』の実姉なのだが、俺と違って魔法が使える。

姉さんは、テーブルの前に立ってはいるが、手は動いている。
台所では、フライパン、包丁、塩、胡椒、が独りでに動き。
居間では、食器棚の扉が開き、皿やグラスが勝手に飛び出しテーブルに移動している。
姉さんの前には新聞が浮き上がり独りでにページがめくれ、焼きあがったトーストはふわふわとテーブルの皿に向かって飛んでくる。

・・・・・言い直そう。姉さんは、魔法を完全にコントロールしている。
それもそのはず、姉さんは『魔導師』の国家ライセンスを取得しているんだから。

優しい声で癒夏は、
「ユウタ」
だが、遊詩は、溜息に似た声で、
「・・・・・・なに？」
と素っ気無く返す。
「愛してる」
「・・・・・・」
「だからユウタも私を愛しなさい。いえ、寧ろ、欲情しても良いわよ」
（・・・・・・こんな事を毎朝言う姉さんでも、僕には大切な姉です）と心で誰かに呟く。
「毎度毎度、朝から変な事言うなよ」
「変じゃないわ、愛してるもの」
「姉弟愛だよね？」
「一軒家に男と女二人きり、まるで夫婦ね。まだそこまでの関係ではないのに」
「いやいや、姉さん、そこまでもなにも姉弟ですから！　肉親だからぁ！　少しは血の繋がりとか考えてから話してよ・・・・・」

「繋がっているのは血だけじゃないわ。赤い糸と運命の糸も、よ。・・・・・・これから他の場所も繋がー―」
その言葉を切断するように、
「無いからっ！！」
だが、癒夏は静かに、
「ユウタ」
「なんだよっ」
「愛はどんな苦難も突破し、どんなに高い壁も易々と飛び越える事が出来るのよ」
真顔でそんな事を言う。
「いやいや、苦難は良いとして、姉弟の壁は越えるなよ！」
「姉弟で、そう、禁断の恋の果てに子供が出来てしまっても、二人の愛があればどんな苦難も乗り越えられるわ」
手を握りながらそんな事を言う。
「あぁあ～～～、そんな苦難はこれから先絶対ありませんからっ！！」
朝から血圧が急上昇。１５０オーバー。

今迄の事を打ち切るように
「よし、しっかりと目覚めているな」
なんて事を言う。

（・・・・・・・・・・はぁ～）
っと心の中で重く溜息を吐く。
「・・・・・・ねぇ、前から思ってたんだけど、いい加減止めない？」
「何の事？」
姉さんは平然と言う。
「俺がしっかり起きてるか確かめるのに、下らない茶番する事を、だよ」

「別に茶番なんかではない。寝惚けていて、ユウタが『愛してる』って言ったら、ユウタは気付いてない様だが、私が『愛してる』を言った後から、『目覚めているな。』っと言い終わるまでは何時も録音しているんだ。その音声をいろんな事に利用させて貰おうと思っている」
と言い。
「・・・・・・結婚披露宴の時とかに流す為とか・・・・・・」
頬を少し紅くしながらそう言った。
「だから、姉弟だからね！　結婚は法律上出来ないからっ！」
「まあ、そんな事は置いておくとして、さっさと食べなさい。学校に遅刻してしまうぞ」
っと、そんな事を言う。
確かに今の会話でかなりの時間を消費してしまったみたいだ。
「そう思うなら、朝からこんなのやんなよー」
遊詩は、うんざりした声で言う。
「では夜、またする事としよう」
癒夏は、本気とも冗談ともとれない声で言う。
「またやるのかよ！　しかも夜に！」
「冗談だ。さあ、さっさと食べなさい」
今の会話を不満に思いながらも、時間が無いので食べる事にした。

そんなこんなあって。
「行って来ます」
「行ってらっしゃい。しっかりと学んで来るのだぞ。」
「・・・・・・あぁ・・・・・・・うん」
遊詩は、とても悲しそうな声で答えた。
「そんな声を出すな。」
「・・・・・・でも」
「そんな顔もするな。今日はとても素晴らしい1日なのだから」
「・・・・・・はぁ」

わかったようなわからないような、なんだか納得したような納得してないような、まぁ良く理解出来ないので適当に頷いておく。
そして、姉さんに見送られ家を出た。

魔法で作られた雪が降る中、遊詩は溜息をついた。
「・・・・・・はぁ～～～～～」
一体、学院で何を学べってんだ・・・・・・・
そう、俺が通っているのは、『学校』ではなく『学院』なのだ
一般の科目を教えている場所を学校と呼び。
魔術に関する事を教えている場所を学院と呼ぶ。
幾ら、魔法が当たり前に成ったからといって全ての人が使える訳じゃなく、『あくまで使える人が多くなった』というだけで世界の６５％の人が魔法を使う事が出来ない。
俺もその一人なのだが。

俺は、魔法は使えないが、魔力はある。
魔法を使うには三つの要素が必要だ。どれか一つでも欠ければ使う事が出来ない。
まず、『魔力』があること。まあ、基本だな、無ければ魔法の魔の字すら無くなる。
次に、『練成』。魔力は霧の様なもので、それを練成という作業で精製する事により『水』に変える作業の事だ。霧は当然触れない。触れないから誰かにぶつける事も出来ない。だから触れるように水に変えてそれを相手にぶつける事が出来るようにするという事。
最後に『魔方陣』。
練った魔力を魔方陣に変え、そこに世界に溢れる魔力を流す事によって魔法が完成する。
自分の魔方陣に変換した魔力と、魔方陣に流した世界の魔力。両方

均一でなければ魔法は発動しない。
俺は、『練成』が出来ない。練成が出来ないという事は、魔力が練る事が出来ないので魔方陣も作れない。要は、
魔法として発動する事が出来ない。っと言う訳だ。
そんな俺が、学院で何を学ぶんだか・・・・・・・・・・・・なんて考えてる間に学校の門前に到着した。

『ウェドエール総合魔術学院』
魔力量。
練成技能。
魔術知識。
魔導技能。
等、他の学院とは比べ物にならない位の優秀なやつ等の集まる学院の中ではトップクラスの学院。中には『宝庫』と呼ばれる一般人とは比較にならない位の魔力を持っている者や、『国家ライセンス』を持っている者。その他に、『先天性魔族障害』という生まれつき身体の一部、又は全身が魔法や魔力によって変化した人の事を指す。その人達は身体能力が高く、魔法によって変化した部分は特殊な力が使える。学者曰く、その部分は歪から現れる怪物に近いらしい。

魔法使いにも様々な呼び方がある。
まず、魔法を使える者を『魔法使い』と呼び一般人より生活する上での待遇が違う。
次に、学院に通う者を『院生』と呼ぶ。これは略称で正確には『魔術学院学習過程生』と呼ぶ。長いのでみんな略称で呼んでるけど。そして、『院生』に魔法を教える立場の人達を『教官』と呼ぶ。正式には『魔法技術指導専門官』だそうだ。これまた長い。
ついでに、世界に発生する歪から出てくる怪物を倒す専門職の人を『魔術師』と呼び、新しい魔法を十以上作り出した者を『魔導師』と呼ぶ。魔導師は魔術師とは違い国家ライセンスなので様々な権限

の行使を認められている。
なので、この学院に通っている者の殆どが魔導師になる為日夜努力をしている。
言い換えれば、それだけ優秀な人材が集まっているからこそ、この学院は世界トップレベルであり続けられる訳だし、魔導師になる為のカリキュラムがある訳だが、
そう、『優秀』。
魔力量、練成技能、魔術知識、魔導技能等、他の学院とは比べ物にならない位の優秀なやつ等だけが入学を認められている訳だ。学院としては最高位の学院。本来なら俺なんかじゃ入る事なんか出来るわけ無いのに俺は、魔力量が膨大な『宝庫』と呼ばれる部類に入っているお陰で入学できた。というのは建前で、他の理由としては、姉さんが魔導師としてだけではなく『神器持ち』の『守護八家』の第四席だから、弟である俺も能力が覚醒してないだけで標準以上の魔術師になる可能性を秘めているでだろう。
っと、いった理由で入学が許可されたらしい。（姉さんの話しでは）かなりの依枯贔屓（えこひいき）で入学したので当然周りからはいい顔はされない。要は、クラスで仲間外れと言うやつだ。

（・・・・・この門を潜るのが憂鬱だ・・・・・）

その時後ろから、
「よっ！　辛気臭いオーラ漂わせてどうしたユー太っ！」
ドンッと強く背中を叩かれた。
「わかってて言ってんだろ？」
っと言いながら振り向く。
「ミカタァ～」
背中を叩いたのはクラスで仲間外れにされているが、こいつだけは親しく接してくれる気の許せる友だ。
こいつの名前は『阿久野・Ａ・味方』なんともギャグのような名

前なのだが本名。（らしい）髪は金色、といっても染めている。（多分）左手には肘までである魔鋼製のガントレット、服は、学生服のボタンを全て外し、中から赤に金のラインが入ったTシャツを着ている。ただのTシャツに見えるが、魔導防護服で有名な一流メーカーの素材を使ったTシャツで、右の二の腕には『清掃委員』と書かれた腕章、靴の代わりに雪駄と下はかなりラフなのだが、Tシャツと同じぐらい有名な一流ブランドの魔導速度加速素材が使われた空蹴雪駄。（かなりお高い）を履いているちぐはぐな服装をしている。

「まあまあ、今更、魔法どうのこうの言ったてしゃーないがな。練成出来ねーんやから、みんな知ってるしぃ、気にする事やないやろ？」

「でも、空気や視線が痛いんだよ。何でお前が・・・・・・みたいな・・・・・・」

「気にしすぎや」

味方は首に腕を掛けそのままグイグイと引っ張って行く。

「と～ちゃ～くっ！」

引っ張られ、あっという間に遊詩のクラス『魔導専攻二科』の教室に到着した。

教室には、半分ぐらいの生徒しか居ないのだが、教室に入るなり全ての視線が集まるというのはあまり気持ちのいいものではない。

「・・・・・・」

遊詩は無言のまま席に着く。

席は、教壇から左側の『境界』側の窓の二段目の一番後ろの席。

学院の殆どの部屋は階段の様に二層に分かれていて、一段目を一席。二段目を二席。と呼び、一席にはクラスで成績の良かった者から前に座っていく。要は、成績の悪い者は後ろの二席に固まるという事。そして遊詩は学年最下位。何せ魔法自体が使えないのだから。

だが、たまに例外なやつも居る。遊詩の隣に。

はははははっと笑い遊詩の席の隣に座るやつ。気の許せる友、『

阿久野・Ａ・味方』だ。こいつは、学年４位という成績なのだが、試験後に行われる席替えで、
「教官っ！」
っと大きな声で呼びながらビッっと手を上げて、
「実は俺、スコープ付き超遠視と集音機能付き耳なので近すぎて教官が黒板に何書いてるかも何言ってるかも全然解らないので、後ろの窓側の席が良いです。勝手に移動しても良いですか？
はい、ありがとうございます。んじゃ移動します」
っと教官は何も言ってないのに勝手に返事をして、遊詩の隣に席を陣取ったのだ。
教官は渋い顔をしていたが已む無く了承した。

隣でミカタが何か言っているけど気にせず窓の外を見る。
そこに広がるのは違う世界。
学院に来るまでの道中で見た空とは違う澄んだ空。
それとは別に黒い雲。
地面から浮き上がる数々の大地。
時折歪む空間。
細長い棒の様なものに乗り空を飛ぶ人々。

そこは異界。

５０５年前に『光の英雄（マキシ・ラストール・ウェドエール）』に封印された場所を中心に八方向に存在する『総合魔術学院』。その総合魔術学院を円の様に線で結び、強力な結界で中の世界を覆っている。
何故そんな事をする必要があるのか、
『闇』の出現した歪は封印したが、完全ではなく力の余波が漏れ出し回りに小さな歪を幾つも作り出した。それにより大量の怪物が出現した。当然排除する為魔法を使う、大きな魔法を使えばそれだけ被害も大きくなる。それに『闇』程ではないが度々強大な力を持っ

た怪物も現れ世界に甚大な被害を齎した。その為、世界に被害を出さない為の空間の確保。その為の『八方魔封』だ。
『八方魔封』とは、『光の英雄』に封印された場所を中心に八方向に存在する『総合魔術学院』の近くには『守護八家』が存在し『守護八家』の持つ『神器』によって結界の六割が維持されている訳だが。どうしてか、『神器』同士は惹かれ合うかのように力が繋がり円、いや、球体の結界の様な物を作り出したので、それをより強固にする為の術式が編み出された。それが『八方魔封』だ。
外と隔絶された世界。入るには世界に八つある『総合魔術学院』の『封門』から入るか、『八方魔封』を破るかのどちらか。後者は絶対不可能。八方魔封はどんな破壊魔法でも破壊不可の超絶魔術だからだ。という事は必然的に前者になる訳だが、
「なぁ、聞いとるかぁ～」
封門は、この窓から見えるグラウンドの右側にある黒い二本の棒の右側に、許可申請証を差し込む事で二本の棒が繋がり門になるらしい。見た事が無いから良く知らないけど。
「なぁ」
今度、初実習がある。実習では実際に封門を潜り封印された『世界の内側』に入り、歪から現れる怪物と戦うことになるらしい。
（・・・・・・俺は・・・・・・・）
「なぁっ！　ユー太っ！」
遊詩は呼ばれていた事に気付き横を見る。
「なぁ、俺の話聞いとった？」
「いや、ごめん。全然聞いてなかった。何？」
「だぁ～かーらぁー、来るんだよ」
「何が？」
どうでもいいといった声で訊く。
「もう直ぐさぁ実習あるじゃん、だから監査官が来るんだとさ」
「監査官？　何それ？」
「監査官ってのは、『世界の内側』に始めて入るときのナビゲータ

ー兼実習指導員みたいなもんでよぉ、噂では美人の女監査官だって話」
あまり興味なさそうに、
「へぇ～」
とだけ答える。
すると、
「何だよ、反応薄いなぁ～」
その言葉に諦めた声で答えるが、
「誰が来ようと関係ないし・・・・・・だって俺――」
「今年は特別らしいぜ」
っと遮り言葉を重ねる。
（・・・・・特別・・・・・・ね）
それは遊詩が、数ある言葉の中で一番嫌いな言葉だったが、味方は知らない。
すると、教壇の前の空間に縦線が雨のように大量に張り付き歪んだ。かと思ったら、そこには誰も居なかった筈なのにいきなり人が立っていた。

『空間魔法』

空間に対し様々な干渉を行う事が出来る魔法だ。
種類は大きく3つ。
1つ目は、『空間移動』字の通り空間に干渉し、すこし制限があるけど、様々な場所に移動できる魔法だ。
2つ目は、『空間攻撃魔法』離れた相手に攻撃する事ができる。
3つ目は、『空間結界魔法』一定の空間に防御陣を敷き身を護ったり、何かを封印したり出来る。
かなり、便利だけど、最高位の魔法で会得するのは非常に困難で、何年も修行しても会得出来ない程だ。
使えない人の為の『魔導具』

元々、魔導具は『光の英雄』が持っていた『神器』の模倣作品で魔法が使える人が使えば効力が増幅し、魔法が使えない人でも元々魔導具には一定の魔法がかけられている為魔力を注ぐだけで魔導具を使う事が出来る。

魔導具は、『魔導彫金師』や『魔法細工師』と言われる人達によって作られているんだが作成方法は工房秘密で外に漏れないよう『口封じの魔法』が職人全員にかけられているらしい。

学院には教官用に空間を移動する為の魔導具『所定空間移動器』が設置してある。これは一定の決められた場所を行き来する為の物で、本人の魔力を注ぐ事によって学院内のどこでも移動する事が出来る『傘式移動器』という小型の魔導具もある。これは一部の権限を持った教官しか持つ事が出来ないらしい。

と、ここまで色々な魔導具があるが、遊詩は一切使えない。魔法が使えない人でも使える魔導具も、遊詩は使えない。

（・・・・・・一般の人でも使えるのに・・・・・・）

知り合いの魔導彫金師の話では、根本的に相性が悪いらしい。

（・・・・・・まったく意味が解らん）

そもそも、全ての生き物は少なからず魔力を持って生まれてくるらしい。魔法使いは、さらに『練成基幹』という練成をする為に必要不可欠な心臓の次ぐらいに大事な臓器？　がある。使える者と使えない者の差は練成基幹があるかないか、ただそれだけ。魔力自体はあるので魔導具や守護符と呼ばれる結界を張るための魔導具は使う事が出来る筈なのに、俺は練成基幹を持たずして生まれて来た訳だが、他の使えない人と違い魔導具、いや、魔法というカテゴリー全てに拒絶されてるようで、魔法関連の道具が一切使う事が出来ない。使う事が出来ないというか、使っても無反応。起動せず、最悪の場合壊れる事も多々ある。

学者も驚きの異例中の異例として魔導解析や、魔導科学の総本山

『魔法と科学は進化の為に』という世界最大の研究施設で分析して貰ったが結局成果無し。
このまま放っても置けないので、この『ウェドエール総合魔術学院』に研究対象として入学が許可されている。前に姉さんが話した事も嘘ではないだろうけど八割方研究対象としてだろう。
でも、文句ばかり言ってはいられない。これ以上姉さんに苦労も心配も掛けたくない。

教官が教壇に立ち、今日一日のカリキュラムの大幅な変更がある と説明し、三日後の実習の監査官を勤める女性が現れたところで初めて遊詩は目を見開き、目の前の出来事を疑った。
「では、刻杖監査官、どうぞ」
「はい」
言い終わると同時、教官と同じ方法で教壇に現れたのは、
「こんにちは。今日から一年間魔導専攻二科の監査兼教育指導を担当させて頂く、刻杖癒夏です。宜しくお願いします」
言い終わりお辞儀をする。
姉さんだった。
現実が理解できず目が点になる。
そんな事はよそに癒夏はこれからの事を話し始めた。
「これから皆さんには私が用意したペーパーテストと魔法の実力を測る『展開実戦』を行ってもらいます。その評価を元にチームを作ります。チームは『世界の内側』に入る際命を預ける仲間ですので無益な争いはしないで下さい。死にたくないのなら。寧ろ仲良くなって下さい。死にたくないのなら」
話しが終わる頃にやっと現状に頭が追いついた。
「皆さんの方から何か質問等ありますか？」
そこで俺は手を上げ質問する事にした。
「あの――」
「「「はいっ、はいっ！、はいっ！！」」」

クラスの全員が一斉に手を上げ、ハイの嵐。遊詩の声は掻き消された。
「では・・・・・・そこの緑の魔法絶縁服を着た女の子」
指名された女の子が立ち上がり大きな声で聞いた。
「今までに死にそうになった事はありますか？」
癒夏は心の中で、あぁ、これが噂の『質問コーナー』というやつですか、と呟いた。
そして、
「あります」
即答。
「『世界の内側』だけじゃなく外の世界でも何度も死にそうになった事はありました。」
それに、
「一番危なかったのは何ですか？」
「一番は、『影の覇者』との戦いのときでした。身体は動かず魔力も尽きかけていました。ですが、心は死んではいませんでした。そのお陰で最後まで食らい付く事ができました。皆さんも諦めてはいけません。最後の最後、死ぬその瞬間まで諦めないで下さい」
「ありがとうございます」
言い終わると直ぐに先程のハイッの嵐。
「次は――そちらの赤い『シェイレルの槍』を持っている男の子」
「はい。刻杖監査官。癒夏様と御呼びしても宜しいですか？」
そう聞いた男はなぜか異常な目をしていた。狂喜に近い崇拝。
「宜しくありません」
笑顔で返す。
「なら、女神様で」
「却下」
「プリンセスは？」
「同じく」
そんなやり取りが5分ほど続き、

「普通に監査官と呼んで下さい」
「畏まりました。刻杖監査官様」
様はどうしても譲れないらしい。
「他には？」
優しい声で問う。
俺が、姉さんと呼びながら手を挙げようとしたときだった。

ＲＩＲＩＲＩＲＩＲＩＲＩＲＩＲＩＲＩＲＩＲＩＲＩＲＩｒｉｒｉｒｉｒｉｒｉｒｉｒｉｒｉｒｒｉｒｉｒｉｒｉｒｉｒｉｒｉｒｉｒｉｒｉｒｉーーーーーーーー

頭を割るような警報が鳴り響いた。
暫くすると警報は少し音量が小さくなり放送が流れた。
『只今、学園の結界付近で歪が発生しました。上級生は戦闘準備に入り、中級生、下級生は即刻「避壕（シェルター）」に非難して下さい』
突然の警報にクラス中がパニックになった。
そこに、
「静かにっ！」
しっかりとした声が混乱していた皆に響いた。
「落ち着きなさい。大丈夫です。私が修正しに行きます。静かに待っていて下さい。歪の大きさから見てもそれほど強力ではありません。」
俺は眼を凝らし歪を見た。直径３０メートルはあるだろうか・・・・・・
「しかし、『鬼』の可能性も拭い切れないので、結界を張るのを忘れずに」
そう言い終わると煙の様に消えた。
「誰かマロット持ってないか？」
味方がそう叫んだ。
「最新式の持ってるぞ」
そう言いながらクラスの前のほうから声がした。

「『世界の内側』に向かう刻杖監査官を追ってくれ」
「ＯＫ」
そう言い終わると、少年が手を広げ何かを呟く。すると、手に持っていたゴルフボール程の丸い赤い玉は、上部から蝶の羽のようなものを４枚だし凄い速さでどこかへ飛んで行った。
マロットを持っていた少年が、小さなスティックを黒板の淵の差込口に挿した。すると黒板には、癒夏が映っていた。

『マロット』
魔導科学によって作られたムービーカメラだ。
本体は小さいが、高画質で元々は危険区域の探査用に作られた物の安価版。
それが素早く門を潜ったとき、姉さんは既に歪の前まで来ていた。待っているのだ。
歪から怪物が出て来るのを。完全に出て来る前に攻撃をすると歪が閉じていない為、逃げられる可能性がある。だから待っているのだ。完全に出てくるのを。完全に殺す為に。
マロットが追いついた頃歪みから、黒い怪物が半分ほど出かけていた。
歪から出てきた『それ』は、黒い身体に黒い翼。パッと見、巨大なカラスの様だった。決定的に違うのは翼が二枚ずつの計四枚。足が三本。ここ最近頻繁に出現する『八咫烏（ヤタガラス）』と呼ばれるタイプで戦闘専門の魔術師十人でやっと滅殺出来るレベルの怪物だ。

完全に怪物が歪から出たところで、癒夏は腰から短剣を抜いた。
右手に持ったその短剣は、装飾過多なほど所々に装飾が施されていた。刀身は金色なのだが青紫のラインが通っていて、そのラインも剣の刃と同じ形をしていた。柄、鍔に至っては、無駄としか言い様が無いものだった。金色の台座に様々な宝石が埋め込まれ、戦う為とは到底思えない代物だった。

癒夏は、取り出してすぐ、内側に真っ直ぐ数ミリの誤差も許さない程、正確な動きだ。しかし、風の様にとても滑らかだった。その途中『八咫烏』の左足と中央の足が切断された。
癒夏と『八咫烏』との距離は物理的に触れることが出来ない程の距離だった。にも関わらず装飾が派手以外何の取り柄も無さそうな小さな短剣で、しかも、ただ正確に真横に薙いだだけ、そこには足を切断する為力を入れたり魔力による身体強化もしていない、ただ薙いだだけの一閃。それだけで遠くに居る怪物を攻撃できる。ただの魔術師と『守護八家』との差をたった一閃で、遊詩に思い知らせた。
足を切られて直ぐ『八咫烏』は姉さんの方にもの凄い勢いで向かって来た。だが、
振り上げる様に斜めに、
一閃。
右の翼が切り落とされる。
振り上げた短剣を少しずらし叩き落すように、
一閃。
左の翼が紙を鋏で切る様に切り落とされる。
下から左上に切り上げる様に、
一閃。
右足と胴体少しを切り落とす、
真横に一閃。
胴体と頭部を上と下に両断。
怪物が重力によって落ちる前に全ての動作は完了した。
教室で歓声が沸き起こる。
マロットから見ていた生徒達には一瞬で怪物がバラバラになった様にしか見えなかった。
そう、『マロットを通して見た者は』。

教壇から左側。『境界』側の窓の二段目の一番後ろの席。
そこから、一人の少年が外を見ていた。
遊詩は窓の外、境界の中で戦っているたった一人の肉親。
癒夏がものの数秒で『八咫烏』を斬殺したのを見ていた。
もし、遊詩が何も持ってない一般人なら、見えずこんな気持ちになる事はなかっただろう。

遊詩の左目が深緑に薄っすらと輝く。
遊詩が物心付いたときにはもう持っていた、不思議な左目。
一般には『魔眼』と呼ばれ、回りからは好奇の眼差しで見られ続け、
「気持ち悪い」
と避けられ、
「すごいねー」
と褒められ、
「自慢？」
と妬まれ、
人々は蔑む目で見下す。
そして、
「大丈夫。私が守るから」
と癒夏に言われ続け。

そして、何度も抉(えぐ)ろうとし、何度も恨み、何度も破壊しても、遊詩の左目にある。

『抉れない』

『魔法も効かない』

『剣で刺しても傷も付かない』
呪われた眼。完全に『人』の一部では無い異物。

望まない。
要らない。
壊したい。
でも、壊れない。

今は諦め、この眼と『共存』している。
姉さんに、壊そうとする度に泣かれたから。
でも、本当は泣かれたからじゃない。
幼いときから姉さんが俺の管理者だった。俺に何かあれば叱られるのは、いつも姉さんだけだった。僕だけが悪いのに、何故か姉さんだけ叱られ、怒られる。
俺は、物陰からいつも見ていた。
叱られ終わり、物陰から見ていた俺にいつも決まって姉さんは言う。
「もう、そんな事しないで」
と優しく。そして悲しい声で言う。
「大丈夫。大丈夫だから。絶対ユウタは何があっても守るから。ユウタが心配する事は何も無いのよ」
そして、こう続く、
「お姉ちゃんは、ユウタの傷付く姿は見たくないの」
そして手を握り、
「約束して。お願い」
と真剣な顔で言う。
自分が俺の所為で傷付いたのに俺の心配ばかり、そんな姉さんが見てられなくて自分からこの『異物』を切り離すのを諦め、共存する事を姉さんに、遠い過去で誓った。

そして、現在。この『力』を使いこなすまでになった。
そして、現実を知る。
幾ら、人と違う力を持っていても、

『及ばない』『追い付けない』『追い越せない』
そんな『境地』というものがある。

姉さんと俺。同じ母親、同じ父親から生まれた血を分けた姉弟。
だけど、埋まらない絶対的な差。
姉さんは魔術師のトップレベル。
弟は魔法すら使えない。
差は魔法の実力以上に心の差がひらく。
姉さんを妬み、こんな俺を生んだ両親を恨み、魔法を使えない事を嘆き、
そしてなにより、
こんな事を思っている俺自身に激怒した。
誰が悪いんじゃない。
如何(どう)し様も無い。
自分が他の人に換わることは出来ない。

だから、諦めた。
全て、そう、全てだ。
魔法も、この眼も、自分も、
だけど、姉さんはそれを望まない。
俺が傷付かない、傷付けられない。
魔法に関わりを持たない様にしてるのに、いつも、俺の手を引く。
いつも、決まった一つの言葉と共に、

『ユウタ、あなたには、恵まれた才能があるのよ』

だけど、癒夏のそんな言葉を切り捨てる様に、

「何もかも、矛盾だ」
と遊詩は呟く。

怪物を斬殺し、すぐ姉さんは教室に帰ってきた。
教師陣が褒め称える。
「いやー、流石ですな」
「流石、『守護八家』ですなー」
「『雷の魔導師』と呼ばれるだけはありますねー」
その他にも賞賛の声はあったが、姉さんは、授業がありますので。
そう言って教室に戻ってきた。
遊詩は、教室の入り口に立っていた。
「姉さん大丈夫？」
どう見たって無傷。それを分かっていて、癒夏に向かって遊詩は訊いた。
「・・・・・心配するな。その内ユウタにも出来る様になる」
その言葉に遊詩は頭にきた。
「姉さんはいつもそうだ！　出来る様になる？　そんなの有り得ない！　俺は魔法を、いや、魔導具すら使えないのにどうし――」
「おっ、刻杖監査官が帰って来たぞ！」
その声を合図に教室から生徒が溢れ出した。
廊下が生徒でいっぱいになった。
賞賛、崇拝。
様々な声が響く。
だけど、
「《鎮まりなさい》」
姉さんのその一言で回りは静かになった。
「授業の時間です。席に戻りなさい」
廊下に居た生徒が、ゾロゾロと教室に戻っていった。
「？？？」
遊詩の頭の中が疑問でいっぱいになった。

（何が起こったんだ？あれだけの興奮を言葉一つでどうにかなるもんじゃない。一体どうやって？）
それを察したのか癒夏が、
「言霊です」
「えっ？」
「日本には、いえ、世界各国に古来より、そう、今の魔法が発見される前から『文字』と『声』による魔法は存在していたのよ。今の『魔法』が発見された事によって形態的に多様化し更に利便性を高めたのよ。そして、今使ったのは『言霊』という『魔術』の一種よ」
「姉さ――」
「もう、戻りなさい」
癒夏は、言葉を切るようにそう言い教室に戻っていった。

「いやー凄かったなぁ、ユー太の姉ちゃん流石『冷徹な一振り』って呼ばれるだけはあるよなー」
「姉さんが何て呼ばれようと俺には関係ない」
自分には関係ないと声で主張した。
「でもよーお前の姉ちゃん、幾つもの通り名があるってスゲー事なんだぜ」
「あ、そーなのか？　そーいえば、『通り名』ってなに？」
「あ～『通り名』ってのわぁ、『称号』だな。『銘』とも言うけど」
「『称号』か・・・・・・」
「そう『称号』。まぁ、数が多けりゃ良いってもんでもねーけど。んで、ユー太の姉ちゃんはドンドン功績を残すもんで、ドンドン新しい『称号』が付けられてくんで、今では、一番最初に貰った家系の後継者としての称号『守護八家』。次に、戦闘魔法を使い黒い怪物と戦う者に与えられる『魔術師』の称号。そして、十の新しい魔法を創りだした者に与えられる『魔導師』の称号。更に、『超規模

破壊魔法』、『超規模操作魔法』、『古代魔法』を自在に操る者に与えられる『ＺＥＲＯ』。その後得意な『雷の魔法』を使い黒い怪物を滅殺しまくったもんで『雷の魔導師』、『雷光の魔女』と呼ばれ、剣の斬撃による戦いを見て回りが、何て冷徹な一振り、と呼んだ事が始まりで以後『冷徹な一振り』と呼ばれるようになったんだが、歴代でも５つも『通り名』を持ってるやつなんて２～３人しか居ないってのー。つー事でユー太の姉ちゃんは凄いっ！　ってゆーこと！」

「へぇー」

「ついでに『古代魔法』は、『魔術』って呼ばれてるぜー」

「魔術？　それって、『古代魔法』以外には使われないのか？」

「そうだな」

っと言い少し考えて、

「言葉を使った『言霊』。文字を使った『呪術』。っていうし、それ以外には『魔術』って言葉は使う事はねーよ。ついでに、『魔術』の威力は『魔法』の比じゃねぇーぜ。だから、形式、分類だけで言えば、魔法のグレードアップ版？　みたいなもんだな」

「そうか・・・・・・・」

（あれも・・・・・・『古代魔法』なのか・・・・・・・）

廊下で起こった現象を思い出し、そして、

（・・・・・・じゃあ、もしかしてアレも？）

「ユウタ、ちょっと待ちなさい」

授業が終わり、癒夏が呼び止める。

「今日が何の日か覚えてるわよね？」

「ああ、そういえば今日か」

癒夏は溜息を吐きながら、首を少し傾けた。

そして、息を吐き終わると顔をあげ、
「今日は7時までに絶対帰って来なさい」
キツくそう言った。
「・・・・・・なぁ、姉さん。あ――」
「刻杖監査官。少しいいですかな？」
遊詩が言い終わる前に少し遠くから、中年の教官が話しに割り込む。
「明日の振り分けの事で学院長が話があるそうです」
「・・・・・・わかりました。すぐ行きます」
癒夏は遊詩の方に振り返り、
「私はこれから用事を済ませて来ますから、しっかりと時刻までには帰って来なさい」
そう言い残し急いで行ってしまった。
遊詩はとっさに手を伸ばし、呼び止めようと、
「姉さ――」
そこで、口を噤(つぐ)む。
（・・・・・・帰ろう）

「刻杖君」
癒夏と別れ、教室に戻り荷物をまとめ丁度教室から出ようとしたときだった。遊詩の後ろから呼び止める声がした。
「待って、刻杖君」
「・・・・・・え、っと・・・・・・誰だっけ？」
遊詩は首を傾げながら尋ねる。
「えっ！？　クラスメイトの顔も覚えてないわけ？　ちょっとショックなんですけど」
「ご、ごめん」

「あ〜ま、いいや。刻杖君さーこの後時間ある？」
「え？　特に――」
ふと思い出した。「――しっかりと時刻までには帰って来なさい」
「あ、いや、ある。今日は姉さんに早く帰ってくるように言われてて」
「えーいいじゃん、ちょっとぐらい。ホントに時間とらせないし、刻杖君『絶対不屈の守護神（ガーディアン）』じゃん」
それを聞き遊詩は理解した。
（あーそういう事か・・・・・・）
「わかったよ。時間が無いからすぐ行こう」
そう言い遊詩は歩き出した。

「うわー、スゴッ間近で見るの初めてなんだー私」
今遊詩は、『境界』の目の前に来ている。『世界の内側』は二つの結界があり、『第一隔壁（ファーストライン）』と『第二隔壁（セカンドライン）』の二つを合わせて『八方魔封』と呼ばれ『外の世界』と隔離している。『境界』と呼ばれているのは『第一隔壁』と『第二隔壁』の境の事を指すのだが、本来ならこの場所には一般生徒は実習以外では入る事が出来ない。だが、クラスで一人『守護者（ガーディアン）』と呼ばれるポジションの者が同伴。もしくは教官の同伴。または、任務の場合のみ許可されている。
そして、刻杖遊詩という人物は、魔法に関連しているものを全て無効化する。その特性は魔法を扱う者には正に天敵。そこで、名付けられたのが『絶対不屈の守護神』という『称号』なのだ。
「もう、いいだろ。さっさと帰ろ――」
「ねぇ、刻杖君」
少女は今までの和気藹々とした顔から、『笑顔』以外の表情が抜けていた。
遊詩はそれを見て、背筋が寒くなるのを感じた。

「刻杖君の『固有能力（パーソナルスキル）』って、『魔法に関する全てを無力化』・・・・・・だったよね？」
「・・・・・・」
答えれない。口が開かない。そうだ。ただそれだけ、ただそれだけの言葉なのに喋れない。背筋に感じた寒気が体中に纏わり付き口を開ける事さえ出来ない。
「じゃあさぁ～～、この『八方魔封』も・・・・・・」
少しの『間』だけど、その『間』には、殺意や悪意、喜び、悲しみ、そんな感情がグチャグチャに織り交ぜられていて、それが更に遊詩に恐怖を与えた。
そして、
「・・・・・・消せるの？」
そう言った瞬間、目の前に居た少女は消え、遊詩の体は宙を舞う。

蹴り飛ばされた。そう気付いたときにはもう、結界に衝突していた。
ビッ、という音が鈍く響く。紙を破（やぶ）く様なそんな音。
「うぁ！」
地面に転がる。
「たた、痛てーなぁ」
遊詩は、起き上がり結界の方を見た。
結界が『破れている』。破壊されているではなく、障子を破るように、結界の遊詩がぶつかった所だけ破れていた。
「へー、こうなるんだ。案外つまらないものねー」
「お前いきなりなに――」
「黙って！」
遊詩を蹴り飛ばした女は冷たく言う。
「『キー』は揃ったのに、なんで？　なんで、なにもないわけ？」

先程とは真逆。冗談や笑い。特に冷静という感情は無くただ何かに取り憑かれた様に、信じたものが嘘だった時の様に狼狽し、ただ、なんで？　と繰り返す。
「おいっ、おま――」
「黙ってっ！」
怒号。
「ねぇ、なんで？」
「？？？」
女は遊詩の方に訊いてくる。
「なんで、なにもないの？」
「？？？」
遊詩は何を言ってるのか分からなかった。
「こう、バーンって感じで結界壊れて、封じ込めてたものとか溢れて世界が恐怖に飲み込まれ、人々は毎日を絶望と共に過ごすとかないわけ？」
「なん、なんだよ・・・・・・お前・・・・・・何者なんだ？」
遊詩は立ち上がり女を見る。
「何って、アンタ分からないわけ？　５年前に拉致られて、今回、強行手段とはいえアンタが『ココ』に居る。その意味が分かんないの？」
「なにを言ってるんだ？」
「・・・・・・ああ、わからない？　はーん、そーいうことか」
女はその言葉を聞き冷静になっていく。
「なんだよ」
「記憶の封印か・・・・・・」
「ふういん？」
「ホントに覚えてないんだ～、かわいそー、一人だけ仲間外れってことね～」
女は気味の悪い笑みを浮かべる。
「本当にお――」

「教えてあげる」
女は遊詩の話を切る様に言った。
「何をだよ」
戸惑い。それ以上に女の腹黒さを感じた。
「だ・か・ら、教えてあげるって言ったの。アンタが覚えてない５年前の事やアンタに『隠された物』とかイロイロ教えてあげるわ」
女はニヤニヤと笑いながら言う。そして、
「もうっすぐ死ぬしぃ」
一層笑みを深くする。
そして、ふふふっと笑った後、遊詩の周りをブラブラ歩きながら話し始める。
「５年前・・・・・・ある計画が実行された――」

ビー、ビー、ビー、ビー、ビー。
部屋に、繰り返し低い警告音が鳴り響く。
［?警告?結界破損度ＬＥＶＥＬ２――結界破損度ＬＥＶＥＬ２――至急、自動修復を起動――自動修復発動――自動修復――不可――自動修復不可――外部からの攻撃に因り、結界の一部が破損しています。『アイギス』に因る自動修復プログラムでは修復する事は出来ません。直ちにＰＯＩＮＴ‐Ｊ‐７７３４１に向かって下さい。至急、現場での早急な処置が必要な状態です――］
そこに、
［?緊急警告?結界破損同時刻――歪の発生を確認――非常ＬＥＶＥＬを?４?に移行します――至急修正してください。これより一時的に手続きのスキップを許可します。早急に修正してください。残り１２分５１秒で歪みから『上位個体』の黒い怪物が出現します。今から７分２秒以内の修正で完全に修復する事が可能です。繰り返します――］

システムの警告を一通り聴き、学院長は声を張り上げ指示を出す。
「ガンダバ教官、直ちに現場に向かい修復を。その他の教官方は二手に分かれて、結界を破壊した者の拘束と壊れた結界から黒い怪物が出ないように結界の修復に向かって下さい」
職員室に居る教官陣が声を揃え返事をし、一斉に散る。
自分以外誰も居ない職員室で一人、学院長は何かを見つめ、
「・・・・・・厄介な事に・・・・・・・なりましたね・・・・・・・」
手を組み小さく呟いた。

「おいっ、まだか？」
男は強い口調で言う。
「・・・・・・」
「聞いてんのか！」
男はなお強い口調で訊くが、訊かれた男は返事をしない。
「おいっ」
いい加減頭にきたのか男は立ち上がり、黙り続ける男の胸倉を掴もうとしたとき、
グッと強引に腕を掴み、男を屈ませる。
そして、顎をクイっと右を指す。
「・・・・・・来たぞ」
「やっとか」
「お前は辛抱が足りていない」
「すまねぇな」
男達は話をしながらも気を抜かず、待ち伏せていた人物を目でしっかりと追う。
そして、
「今だっ」
そう言った途端、さっきまで怒っていた男が一瞬で待ち伏せして

いた人物の後ろまで移動していた。
そして、どこに隠れていたのか様々な方向から一瞬で人数がやってくる。
男達は待ち伏せしていた人物を気絶させる。
そして、待ち伏せしていた人物を囲っている中の誰かが言った。
「こいつか？」
待ち伏せしていた人物を片手で襟首を持ち、目の前の男に確認させる様に向ける。
「ああ」
訊かれた男は、待ち伏せしていた人物の顔を見ながらそう答えた。
グッタリと男の手でぶら下げられているのは少年だった。
魔法に拒絶され、
魔法に失望し、
魔法から逃げ、
だが、
魔法に追われ、
魔法に憑かれた少年。
刻杖遊詩がそこには居た。
「間違いない。では、本部に戻るぞ」
「「了解」」
そこに居た全員が声を揃えた瞬間、そこでは何も無かったかの様に全て消えていた。
男達も、
刻杖遊詩も。

「・・・・・・」
遊詩は一人、学院からの帰り道をゆっくりと歩いていた。
ウェドエール総合魔術学院は、中等部と高等部とに場所が別れて

おり、高等部は家から近いが中等部は家からかなりの距離がある。
まぁ、そんなのは特に関係ない。
何故なら、この頃。５年前の遊詩はまだ、ウェドエール総合魔術学院に入学が認められず普通の一般『学校』に通っていたからだ。
だから、学校は中等部より更に遠く、だからと言って癒夏は遊詩に移動の際、乗り物を利用する事を許可しなかった。
そして、そんな長い帰り道。
「・・・・・・あー」
つらいな～。
もう、学校行きたくねー。
遊詩はそんな事を繰り返し頭の中で呟く。
魔法が使える者は少なからず魔法に関係する学校に通うものだ。だが遊詩は、魔法が使えるのに一切魔法とは関係無い普通の学校に通っていた。『魔法は何歳になっても発現する可能性が有る』という本が売られている通り、魔法に年齢制限は無い。何歳になっても魔法使いに成れるのだ。だがスポーツと一緒で魔法使いとして生れた者と魔法使いに成ったばかりの者では潜在的なレベルに大きな差が生れる。そんな事は分かっている。でも、魔法という未知の力を誰しも求める。元から持っている者は更なる高みを、持っていない者はそれを求め奮闘する。一般の学校もその希望を叶える為、半年に一度『魔法適合検査』という魔法因子が適合したかどうか確かめる事が出来る簡易的な検査を実施している。その結果で遊詩は魔法因子適合率『１００％』。魔法使いとして確立しているのだ。なのに一般の学校に通い続ける。それはいじめへと繋がる。魔法が使える者が魔法が使えない者の中で暮らす。これは一部の人間の中では蔑まれている。見下されていると感じる者も少なく無く、何故魔法が使えるのにここに居るんだ？　バカにしているのか？　等という実体の無い理由で因縁を付けられ虐められる。
遊詩が魔法が使えたならそんな苦労はしなくて済んだのだろう。だが、実際の遊詩は魔法因子が適合はしているものの、練成が出来

ないので魔法陣を形成出来ない。だが、そんな事実を本人の口から誰かに言う事も誰かから伝わる事も無いので『見下すやつ』のレッテルを貼られ虐められる。
『誰かを羨む』人の根本にある感情の一つ。
今日も、大小含め数にして七度の虐めがあった。教師も見て見ぬ振りをし、癒夏に相談しようにも今はどこの空の下にいるかさえ遊詩には推測も出来なかった。
遊詩は空を見上げる。下ばかり見て歩いていても気分が下がっていくだけ。ならせめて上を向こう。と遊詩は決めていた。
大きな空に自分の悩みを移す様に空を見上げ、気持ち的に霧散しかけていたその時だった。
（ん！？）
いきなり背後に気配を感じる。背筋がビクリと震えたのが分かる。遊詩が後ろを振り返ろうとした時だった。遊詩を囲む様に黒尽くめの集団が現れる。
（囲まれた！）
と思った時には既に遅く遊詩は気絶させられていた。

遊詩が目覚めたのはこの二時間後だった。
薄暗い廃墟、潰れた工場跡地の様な場所で、屋根を支える太い鉄の円柱にワイヤー入りの縄で縛られていた。
「何者だ、お前達」
目の前に囲む様に立つ黒い集団に向かって怒りを腹に抑え問う。
「我々が何者か？　そんな事は君には関係無いが――教えてあげようっ」
黒尽くめの集団から一人、陽気な口調で小躍りしながら前に出てくる。
「ここが何処かわ教えてあげれないけど、君の置かれたタ・チ・バってのは、教えてア・ゲ・ル。何で君をこんなとこで縛ってるか、ずばり君は人質よ。アナタのオネーイサンが我々の組織と敵対して

いるのよ。だからこれ以上邪魔するならアナタの愛しの弟さんを留め糸の切れた本の様にバラけた状態で返却するわよ・・・・・・なんて言っといたわけー」
一つ一つが何かムカつく喋り方だが、今はそんな事につっこんでいる場合じゃない。
「姉さんのとばっちり。って事？」
「んまぁーそんなとこ」
何かポーズがムカつくけど置いて置こう。
「俺はいったいこれからどうなるんだ？」
「そーうね。アナタのオネーイサンには、ネットワークを通して通達してあるけど。もし要求が受け入れられなかった場合、最悪アナタには死んで貰うわ。後の事はそれから」
「・・・・・・受け入れられなかった場合は死・・・・・・か。バカだろこお前等。敵対組織って事は、多分、悪の組織とかそんなんだろ？　しかもここまで大掛かりな事をやる連中だしそれなりに大きいんだろ？　そんなやつ等を殲滅するのと俺を助けるのどっちが世界にとって重要か何て分かり切った事だろ」
半ば諦めの様に言う遊詩に黒尽くめの集団は笑う。
「――はははははっ。君はオモシロイ、実にオモシロイよ。君は何にも知らないんだね。竜の因子。いや『《悪竜》破壊・虚弱の王』をその身に宿す災厄の申し子。それがいかにこの世界のとって重要か、君はなーんにも知らないんだ」
嘲笑(あざわら)う目の前の黒尽くめに遊詩は叫ぶ。
「何でお前達が、その事を知ってるんだ！」
「暗黒魔術の最奥儀、『竜魂憑依(りゅうこんひょうい)』は我々の主が生み出し、《悪竜》を憑依させたのも我が主だ、知っていて当然だろう」
「なっ！？」
驚愕の事実を告げられ頭が凍結しそうになる。
「まあいい、暇潰しに教えてやろう。話せば長いのだが・・・・・・」

黒尽くめの話しは、更に過去の事実を遊詩に突き付ける。

それは遊詩が6歳の頃だった。学校の友人と夏に肝試しをしようと誘われたのが切欠だった。遊詩は友達を作るのが苦手な奥手の少年だった為、そんな誘いは始めての事で胸を躍らせ両親に必死で懇願した結果、初めて夜（といっても時間的には夕方）の子共達だけの夏祭りに参加する事が出来るようになった。

だが、これはクラスの者達の嫌がらせの一つで、遊詩をからかおう。という集団苛めだったのだが、そんな事とも知らず、のこのこと集合場所に五分前行動で到着した遊詩だった。

周りには誰も居ない。

「！・・・・・・そっちにいるの？」

だが、林の奥で何かがゴソリと動いたのに気付き、後を追う様に奥深い林の中に入って行く。

林の中はさっきまで居た場所より数段暗く、どんどんと奥に進んで行くとそこには草や木が一切無い空間が広がっていた。

「いない・・・・・・あっ、まって！」

草木の生えない空間から少し先に洞穴（ほらあな）があり、何かの気配をそこから感じた。遊詩は急いで洞穴の奥へと踏み込む。その時だった。

「！！？」

遊詩の体が禍々しい魔力に呑まれる。

【汝、我を求めるか？】

「え？」

【汝、我を求めるか？】

「なんのこと？」

【汝、我を求めるか？】

遊詩が質問を変えても頭の中に響く声はそれ以外何も答えない。

「なんなんだ――」

【汝、我を受け入れよ】

言葉を遮り声が言い放った瞬間。洞穴の中に溢れていた魔力が、遊詩に吸い込まれる様に体に入り込む。強烈な魔力に遊詩は意識が混濁し地面に倒れ込む。

「終わったのですか？」
黒装束の何者かは、黒装束の何者かに問う。服装だけではなく顔や服の隙間から見える肌まで闇色なので、その表情からは何も読み取る事が出来ない。
「ああ、終わった。これで我らが悲願も成就されよう」
訊かれた何者かも訊いた何者かと一緒で、顔や服の隙間から見える肌も闇色なので何も読み取れないが、その声は、何かを達成した時の喜びにも似た声だった。
「皆、良く聞きなさい」
後ろを振り向き、静かに闇に問う。すると何処からとも無く黒装束の何者かが数人現れる。
「この少年は？贄？に過ぎません。大きな野望を打ち砕き、世界を救う
為にはまだまだやる事はたくさんあります『八方魔封』を打ち砕き、『守護八家』の野望を食い止める為、皆、私に力を貸して頂けますか？」
何者かがそう言うと、周りの者達は無言で頷く。
「世界を救うのは我らです」
一拍置き、
「『魔滅の宝剣（ガラシア＝ハーランド）』を破壊する」
力強く宣言する。

「本気か？　それは今の世界を壊そうとしているんだぞ？」

封印の要である魔滅の宝剣を破壊すると聞かされ、正気か？　と訊く。
「救世とは何時の時代も破壊から始まるのよ」
「狂ってる」
遊詩のその言葉に黒尽くめの一人の頭にきた様で、一歩乗り出し遊詩に叫ぶ。
「真の救世主の意図など、お前如きに理解出来るものではないっ！　口を慎めっ」
「・・・・・・おい、構えろ」
遊詩から離れたところ、この建物の出入り口付近から緊張した様な小さな声が警告する。その警告はとても小さな声だったにも関わらず黒尽くめの集団は、出入り口に体を向け各々に武器を取り出す。出入り口から順番に、刃物、鈍器、槍、拳銃、杖。杖はただの棒切れではなく、魔法をより正確に簡単に、強力に発動する為の魔導具だ。
「どうしたんだ？」
遊詩は近くに居た者に尋ねたが、先程とは違い声どころか振り向く事さえ無い。
「・・・・・・残り１００メートル・・・・・・――っ！！！」
誰かが何かにカウントしたときだった。部屋の中央、黒尽くめの集団が壁に向かって吹き飛ぶ。それは突然の事で吹き飛んだ者以外は唖然としていた。
「な・・・・・・にが起こった？」
だが、急速に現状を理解し、
「構えろっ！　空間魔法だ！　魔法隊っ撃て！」
掛け声と共に魔法の光りが一斉に中央に向かって放たれた。
爆音が部屋に響く。大きな部屋が土煙で満たされる。
「・・・・・・やったか？」
「油断をするな。この程度で死ぬとは思えん」
黒尽くめの予想あ的中する。それは不安を煽る様に土煙の中、ゆ

っくりと喋る。
「まず、トラップは気付かれない場所に仕掛けなければ意味を成さない。次に、空間魔法が使われる事を懸念し対策を講じなかった事。最後に、私の弟を拉致して人質にした事」
最後の言葉が特に黒尽くめ達の体に響く。大声を出した訳でもないのに黒尽くめ達の数人は、突然現れた者に対し恐怖を覚え身動きが取れなくなる。
「死ね、とは言いません。私も鬼ではありませんから」
そうは言うが、段々土煙が収まり見え始めた姿は、まさに鬼の様だった。
「らっ、雷光の魔女――刻杖癒夏・・・・・・！」
誰かの呟きが部屋に小さく響いた瞬間、
「「「っ！！」」」
鬼の形相としか言い様がない癒夏の周囲を囲む黒尽くめの集団が、攻撃性を感じさせない優しい光に包まれた。
「・・・・・・な、何だ！　何なんだ？」
光に包まれていなかった壁際の者達は、目の前の現状に頭が追いつかない。
確かに外野に居た遊詩からすれば、攻撃性を感じさせない優しい光りに見えたが、実際には、電撃をミクロサイズまで小さくした極小粒の塊で、それが数十億と集まり霧の様に場を浸食する雷系魔法『スチーム・ボルト』と言い、雷系魔法の5段階の中で上から2段目に属し、攻撃魔法でも上位に入る攻撃力を持つ魔法だ。しかも、この魔法の凄いところは攻撃対象者を絶対に殺さないという点だ。対象者の身動きが取れなくなるまで体に引っ付き、心音や脈拍が弱くなってくると離れ、それ以上危害を加えないという攻撃性を持ちつつ、対象者の安全も確保出来るという利点を持った魔法なのだ。
「動かないでください。死にたくないのなら」
絶対に殺さない魔法を脅しの材料に利用する。それは魔法発動の瞬間を相手に見せないよう砂煙で隠し、一瞬で大半の人数を削り取

り心理的に相手を攻めるといった巧妙な作戦だった。
黒尽くめ達も迂闊には動けず手を拱(こまね)いていた、そのとき一人が動く。
「こいつがどうなって――」
遊詩に剣を向け人質に取り、形勢を逆転させようとした――のだが、
「動くな、と言いましたが？」
黒尽くめの剣を折り、遊詩を誰にも触れさせないかの様に電気が半球状に広がり護っていた。
「雷装・威天槍迅(いてんそうじん)――」
癒夏がそう呟いた瞬間、癒夏の体を取り巻く様に電気が渦の様にうねる。
「――雷帝の武具(ライティノブグ)」
うねる電気が、右手右脚、左手左脚に集約され白鎧ならぬ雷鎧の形に形成される。
「逃げろぉっ！」
黒尽くめの生き残った者の一人の、そんな言葉で蜘蛛の子を散らす様に四散するが、
「遅い」
その一言と共に雷光が疾(は)しる。雷光は黒尽くめ達の逃げ足より速く、声を上げさせる猶予すら与えず全てを叩き伏せて行く。電光は癒夏の手の動きに合わせて、通常では有り得ない動きを見せる。癒夏の思い通りに伸び縮みし、癒夏の思い描く通りに屈折し、癒夏の思惑通りに敵を薙ぎ倒す。一つ計画通りに行かなかった事は、数人の黒尽くめを取り逃がしてしまった事だ。
「遊詩、無事？　どこも怪我はない？」
動ける者は癒夏と遊詩しか居なくなった空間で、癒夏は急ぎ足で遊詩に駆け寄り心配顔で安否を確認する。
「大丈夫だよ。姉さんこそ何でこんなところに居るの？」
そんな疑問に笑って簡潔に答える。

「決まってるじゃない。弟を護るのは姉の務めだからよ」
笑顔の癒夏に遊詩は何も言えなくなる。
（・・・・・・勤め、か。家から科せられた義務。『竜の落胤』を護る為・・・・・・か）
「遊詩、《今日一日の事は忘れなさい》」
「――っ！」
癒夏の言葉が遊詩を軽く揺らす。遊詩自身の意思とは関係無く強制的に眠りにつかされる。
遊詩が眠ったのを確認し優しい顔で頭を数回撫ぜる。
「さあ、帰りましょう」
癒夏のその言葉と共に、癒夏と遊詩を包む様に魔法陣が展開され一瞬で空間を越える。

第二部　過去編＝記憶編？

「っとここまでは思い出したかな？　私がこっそり見たことは全部話したつもりだけど」
（だから、知らねーっての！　話しから察するに『言霊』で記憶飛ばされてんじゃねーか）
「いや、全然」
「あーメンドくさ。残念だけど私、封印の解呪魔法は使えないんだよねー。だから、今話したことは全部信じて。じゃなきゃ話進められないし」
（信じるも何も、信じる為の要素が一切見当たらないんですけど・・・・・）
　そう思いながらも話を進める為に頷いておく。
「・・・・・・まだ納得出来ないって顔だねー。まーメンドいから先に進めるね？　私も詳しいこととか聞かされてないからよく知らないけど、アンタの中に植え付けた『悪竜』を利用して世界の中心に刺さってる『魔滅の宝剣（ガラシア＝ハーランド）』を破壊する。そうすれば世界は前のような安全な世界に戻るのよ」
「どういう意味だ？　前のようなとは、お前の言ってる前っていつの事だ？」
「ああ、そーいえばそこから、か」
　女は不敵に笑う。
「アンタさー、今の世界がホントウの世界だと思ってる？　もし思ってるならもう、少ししっかり世界を見た方がいいよ」
「本当？　どういう意味だっ、俺にも分かる様に説明しろ！」
「アンタは歴史の授業を受けていて、なにか不思議に思ったことはない？」
「ごめん、俺ほとんど学校行ってないから知らない」
　真顔で答える遊詩を見て、少しグッタリとしながら女は話始める。

「あー、そう。んじゃあ魔法は？」
「使えないから分からん」
「あー、しまったっ！」
墓穴を掘った、と言う顔で少し声を張り上げる。
「ああ、もうっメンドくさっ！　いいわよ！　ラチがあかないしっ、アンタは教官やマスコミが語ってる歴史には違和感は感じない？　ホントウはそれは『おかしい』ことなの。千年も昔に見つかった技術？　なにそれ？　ホントウはもっと昔からあった技術よ！　世界をこんなのにしたのも、歴史を隠蔽したのも、全ては――」
女が核心を口から零すその直前。それを邪魔するかの如く一つの魔法弾が地面に着弾する。
「なっ！」
女は後ろに飛び退く。

『Ｍｉｓｓ――「速度・貫通・破砕＝強化弾Ｂ」、標的に着弾ならず。刻杖教官お願いします』
無機質な女性の声が通信機越しに癒夏に合図を送る。
「あと、一秒ほどです！」
言葉と同時、遊詩を蹴り飛ばした女に向かって雷光を纏った一撃を放つ。雷光と共に雷撃が刃に沿って地面を抉る。その余波が空気中にも放たれ遊詩の服の端々が焦げ付く。
女は直撃スレスレで躱し、チッ、と舌打ちを打つ。
「逃がしませんよ」
短剣を横にし、振り抜こうとした時だった。
「はあ～いっ、ストップ、剣を収めてえー。収めないとこいつ、死んじゃうかもかも？」
女は遊詩の後ろに回り込み首元に刃物を当てる。
「スッパスッパッっと、首が飛ぶかもかもよ？」
ニヤリと勝ち誇った様に笑う。
「動かないでねー。今持ってるのは魔法とは一切関係のないただ（、

、）のナイフ。言ってる意味わかるよね？」
癒夏は表情には出さないが、内心では腸（はらわた）が煮えくり返る思いだった。
（私の事も相当調べたみたいね・・・・・・）
遊詩は魔法に関係する全てのものを無効化出来るが、魔法とは関係無い剣や銃、普通のパンチやキックそれとフライパン攻撃等は、一般的な人間的強度を超えていた場合、傷付くもしくは死ぬといった事も普通にある。だが、旧時代なら死ぬ事もあるだろうが、今は魔法が普及している時代だ。治療の面でも大いに力を発揮している。擦傷、裂傷、打ち傷、病気でさえ瞬時に治してしまう術式さえ存在する。
だが、癒夏は治癒の魔法が得意ではない。大規模破壊、一点集中突破、魔法分割操作等、攻撃に関する魔法は大の得意なのだが、結界、解呪、封印、治癒等の護りに関しては院生レベルだ。っといっても、ウェドエール総合魔術学院の院生を基準としたものなので他の魔法使いより上なのは確実だが。それでも専門の魔法使いと比べれば数段劣るのも確かだ。
もし遊詩が大怪我を負った場合、それが命に関わる程の大怪我だった時、治療出来る者は居ない。擦傷や骨折程度なら癒夏にも簡単に治す事が出来るが、臓器や血管に損傷を負った場合治す事は不可能だ。だから癒夏にとって、
「首とか切れたらタイヘンだね～。アナタ、治癒系の魔法不得意らしいし。弟さん死んじゃうねー」
この状況は大変好ましくないのだ。
「でも、そんなに長居すると人が集まって来そうだし、そろそろお邪魔しようかな・・・・・・」
この場所で、この状況で、そんな事を女は簡単に言ってのける。
「そんな事が出来ると思っているの？」
癒夏が睨みながら厳しく問う。それに対し鼻で笑い、
「当たり前」

スカートのポケットから何かを取り出す。大抵この場合、何かを取り出すという事は抵抗する為の何かを取り出すという事だ。何時もなら抵抗する前に阻止するのだが、今回はそれが出来ない。癒夏は、ただ女が抵抗するのを見ている事しか出来ない。
「これがあるし・・・・・じゃ、ねっ」
女は遊詩の背中を蹴り飛ばし癒夏にぶつける。癒夏が遊詩を優しく受けとめ女の方を向いた時には既に遅かった。女の地面には青白い魔法陣が地面から浮かび女を包んでいた。
「バイバイ、オネーさん。・・・・・・またね、絶対不屈の守護神さんっ」
そう言い残すと女の姿は、小さな光の粒子を幾つか残し跡形もなく消えた。
「・・・・・・しまった。そういう事でしたか」
「何が？」
少し悔しそうにムッとする癒夏に遊詩が質問する。
「本来ならここ――『境界』、第一隔壁と第二隔壁の境は、ユウタの固有能力と同じ、いえ部分的に同じ様に魔法が使えないの。部分的にと言ったのは、ユウタと違って全ての魔法が使えない訳では無く、『攻撃魔法』『空間魔法』の二種類だけ制限が掛かっていてそれ以外の魔法は使えるの。だから私は少し油断していたの。ここから逃げる為には、ユウタを人質にして私の横を突破するか、私を倒しここから抜け出すしかない。二つとも出来っこない。素手でも少しユウタから刃物が遠ざかれば無傷で助けられる。でも、実際は違った。結界の一部破損と同時に歪みの発生。そのお陰で非常レベルが４まで引き上げえられたの」
「４になると魔法の制限がなくなるの？」
「ええ、一時的に手続きのスキップが許可されると同時に、緊急時の為制限の解除もされるの」
癒夏の説明を聞き、癒夏が何故ムッとしたかが分かった。
「だから取り逃がした・・・・・・と。そういう事？」

「ええ・・・・・・でも、ユウタが無事で良かった」
そう言って微笑む癒夏を見て、遊詩は少し落ち込む。
「・・・・・・また、足手まといになったんだな」
「ん？　どうした、どこか怪我でもしたのか？」
思わず口にしてしまった心の声は幸運にも癒夏には聞こえなかった。
「ううん。何でもないよ」
そして、誤魔化す様に笑うが、その顔は少し翳(かげ)っていた。

第二部　過去編＝記憶編？（後書き）

眠いダルイ暗いの三拍子！　暗い部屋、電車疲れ、睡眠時間３時間！　早く終末にならないかな・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4912y/

使えないっ！

2011年11月17日03時10分発行